
俺と彼女と幼なじみの関係！

函南 明紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女と幼なじみの関係！

【Nコード】

N5529Y

【作者名】

函南 明紀

【あらすじ】

ある女の子を好きになってしまった少女“桂木 美奈子”

美奈子に好意を持たれてしまった少女“藤林 結衣”

結衣の幼なじみで、美奈子にある告白をされた主人公“山岸 優太”

不思議な三角関係が織り成す、ちょっと変わった恋と青春の物語。

“プロローグ”的な立ち位置の“なにか”

“あの人の事が好きなんだ”

俺は“そいつ”にいきなり呼び出され、いきなりこんな事を言われた。

あまり知らない奴から、いきなり俺の幼なじみの女の子の事が好きだって言われたから俺は驚いた。

（驚いたのはそれだけじゃないんだけれど……）

次に言われた事は、

“彼女の好きなタイプを聞いてきて？”

そんなこと自分で聞けって話だぜ……

（まあ、しぶしぶOKしちゃったんだけどね）

ただ一つ、俺に言える事がある。これは間違いないと自信できる。

それは、彼女はそいつの事を恋愛対象として見てはいないということだ。

彼女が俺の事を好きってわけじゃないぜ？（………多分）

その理由は………

“そいつ”の正体は、ごく普通の“女の子”だからである……！

（………いわゆる“百合”ってやつ？）

この時から、静かだった（気がする）俺の人生が、ガラリと変わっていった。

“空気”な俺の身近な人達の“人物紹介”的な一日目

とりあえず自己紹介しておこう。

俺の名前は“山岸 優太”

どんな性格かって言うと……

積極的に誰か（主に女子）に話し掛けていくってタイプじゃなく、クールを装って教室の隅で物静かにしている様な感じ……かな？容姿の特徴は、中肉中背で、中性的な顔立ちで髪が少し長い。（周риからの話によると）

そんでもって眼鏡をかけている。

ちなみに眼鏡は伊達だ。理由は、落ち着いたキャラを作るためって感じ。

今は学校へ登校中。

周りは友達と楽しそうに話しながら登校しているが、残念なことに俺は一人寂しく登校している。

俺はあまり他人に話し掛けない。だから友達が少ない。というより他人とあまり接する事が少ないから友達ができない。

それは教室に入っても同じ。クラスメートからはほぼ“空気”扱いにされている。いじめられるよりはマシかもしれない。

今日も教室がガヤガヤとうるさい中で、俺は隅っこで静かに読書を始める。

教室中のざわめきが一度止まる。そして、新たなざわめきが、男子を中心にして起こった。

ある女の子が登校してきたからだ。

「……………うわっ！桂木さんだ」

「ヤベー、チョー可愛くね？」

「……………」

一応紹介しよう。彼女の名前は“桂木 美奈子”。うちの学校のマドンナみたいな奴だ。

スタイル抜群で、学校内では一・二位を争う程の学力の持ち主で、男子だけでなく、少数の女子からも人気だ。

「美奈子ちゃん、おはよう」

「うん、おはよう……………」

「おはようございます！桂木さん」

「う、うん、おはよう」

「やった！挨拶してもらえた」

「……………眠い」

俺は挨拶している様子を見ながら、つい欠伸をしてしまった。

多分、彼女が学校に登場して騒がないのは、俺ぐらいかもしれない。

「……………」

「……………？」

俺が顔を上げると、彼女は違う方向を向いていた。

気のせいかもしれないけど、桂木がこっちを見ていた様に見えた。

まあ、別にどうでもいいけれど……………

早くも今日の授業が終わった。

俺は、帰りもやっぱり一人だ。

「ねえねえ、帰りにあの店に寄っていいこうよ」

「うん、いいね。あそこのスイーツ、チョーおいしいらしいよ」

「えー！マジ？」

そんな感じに話しながら帰る奴らを見て、俺は溜息をこぼす。そんなもって小さく呟く。

「…………友達欲しいな」

「ふう〜、寒い」

今の季節は冬。俺達中三にとっては、一般入試を受ける高校を決めている時期だ。

「そついや、もうすぐ一般入試か……」

……自己推薦で受かった俺には関係ないけど」

そんな感じのことを呟いていると、頬の辺りが不意に温くなる。

「ふえっ!？」

奇妙な悲鳴を上げ後ろを振り向くと、そこにはうちの学校の制服を着た女の子が立っていた。そいつは手に、ホットココアの缶を持っていた。

「フッフ、優太君つてば、変な声上げちゃって」

彼女はクスクスと笑つていやがる。

「…………なんだ、結衣かよ」

「“なんだ”とは何よ〜」

こいつは“藤林 結衣”。俺と同じクラスの奴だ。

「優太君はまた一人で帰つてんの？寂しいね」

「煩い。そういうお前はどうかんだよ？お前も一人じゃん」

「私?……私は家で勉強するから早く帰るの。まだ志望校に合格してないからね〜」

「ふう〜ん」

「自分で話題振つといて“ふう〜ん”はないよね」

「知るかよ。…………そんで、どこに行くつもりなん？」

「ん?……優太君と同じ高校」

「…………はあっ?またお前と同じかよ!」

「そついえばそうだね」

言っていなかったが、俺と結衣は保育園からの幼なじみで、それは

結構長い仲なのだ。

「うう、なんだよその腐れ縁は！」

俺は柄にも無く、空に向かって大きく叫んだ。幸いにも周りには人がいないので、目立たずに済んだ。

俺らは歩きながら話している。

「優太君って変わったよね。前はあんなに明るかったのに……」

「ああ、あの頃はまだ楽しかったな」

「いつから変わったんだっけ？」

「中一の三学期くらいだっけか？周りの和に入れずにいて、あいつらがどんどん離れていったからな。仕方ないっちゃあ仕方ない」

「……でも私は、いつまでも優太君の友達だよ？」

「……バカ！」

自分でも顔が赤くなるのがわかって、つい悪口を言ってしまった。

「なんで!？」

「……自分で考えな」

……こいつの発言は恐ろしい。男子がついドキッとしてしまう様な言葉をサラっと言いやがる。

恥ずかしながら、俺もその一人である。

もっと慎重に言葉を選んでほしいものだ。俺、こいつの将来が怖いよ……

怖いといえば、さっきから何か視線を感じる。時々後ろを振り向くが、何度見ても誰もいない。

「それじゃ私こっちだから……」

「……おう」

「また明日ね」

「明日会うかは知らんがな」

「もー！私ら席隣じゃん！」

「そうだったけ？」

「……むう、優太君のバカ！」

そう言つて、結衣は家の中に入つて行つた。

そして俺は……

その隣の家の中に入つて行つた。

家も席も隣の幼なじみつて……

「……なにこの腐れ縁」

俺は小さく呟いた。

次の日。

俺はいつも通りに学校に着き、いつも通り目立たないように過ごしてきた。

しかし一つだけ、いつも通りじゃない事があつた。

それは放課後、授業の後に起きた。

俺が帰る準備をしていると、目の前に誰かの気配を感じた。

「……………」

顔を上げると、目の前には、絶対俺には接して来ないであろう人物が立っていた。

「……マジかよ！」

「山岸のやつ、何やらかしたんだ！？」

男子達のどよめきから察したが、目の前に立っている人物は、あの桂木だった。

「……何か用な訳？」

俺は素っ気なく尋ねる。

「……………ちよつとついて来て」

桂木はそうだけ言っと、すぐさま教室を出て行った。

「ちよつ……………!?!」

俺は急いで彼女について行った。周りの男子の視線が痛かった。

ついて行くとそこは体育館の裏だった。いかにも“告白”ってやつをするのに相応しい場所だ。

「……………」

「……………」

俺は何も言えずに立っていた。桂木も何も言わない。

「俺に用があるじゃないのか？」

「そうだね。でも、ちよつと心の準備が……………」

え？心の準備？何でそんなの必要なの？

体育館の裏、男女二人きり、心の準備…

ま、まさか！これは!?!

「わ、私……………」

うわぁ…何これ？何かドキドキするんだけど!?!

「私……………」

俺はつい目を閉じてしまう。

さよなら、俺の静かな学園生活……………

「私、藤林さんの事が好きなの!?!」

「……………え？」

俺が考えていた告白とは全く違った。

この告白が、俺の……………これからの人生をガラリと変えてしまった。

この日から、俺の……俺達の人生が静かなものから不思議なものに
変わったんだ。

桂木の“告白”から二日目……残念ながら面倒なことになりました。

「私、藤林さんの事が好きなの」

と言われた俺。ただいま思考が停止しております。

「……………聞いているの？」

「ちゃんと聞いている」

「ぼくっとしてたわよ」

聞いているからこそ、そうなったんだろうが！

……………とは流石に言えない。

しかし、まさかこの学校に同性愛者がいるとは思わなかった。しかも、よりによって桂木みたいな学園のアイドル的存在の奴がそれとは……………そりゃーびっくりするって！

それでも俺は、出来るだけ無関心を保ったまま質問をする。

「何で結衣……………藤林が好きなんだ？」

「なんでって……………わからない」

「はあっ？」

「私だつてわかんないわよ。こんな気持ちになったの初めてだし」

「……………そうですか」

察するに、うちの男子等は恋愛対象として見られていなかったという事ですね？

残念！男子達よ。

この話は置いておこう。そしてもう触れないでおこう。

「そういう訳で、藤林さんの志望校を教えて？」

「……………なぜゆえに？」

「私、高校に入ってから藤林さんとの距離を縮めたいのよ」

「……………あっそ……………っつーかそれぐらい、自分で聞けよ！？」

「聞けないわよ！恥ずかしくて、まともに顔を見れないんだから！」

知らないよ……と叫びたかったが、なんとか抑えることに成功した。

「……………桜ヶ丘高校」

「……………何が？」

「あいつの志望校だ。俺と同じって言うてたから、多分間違いない」
「ホントに？じゃあ次は、藤林さんの好きなタイプは？」

「知らない。…………てか、何で俺に聞くわけ？あいつの女友達に聞けばいいじゃん」

俺がそう言った瞬間、彼女の顔色が変わった。

「…………聞けるわけない。聞いたってあいつらは答えない。あいつら、私が嫌いだから…………」

そういえば、桂木みたいに見た目が可愛い女子は、男子から人気でも他の女子からは嫌われるって噂を聞いたことがあるぞ？
あれって実話だったのか！

…………でもいいけど…………

「…………なんかゴメン、暗い話して…………」

そう言う桂木の顔は、今にも泣きそうな感じだ。

「…………いや」

そんな顔でそんな事言われたら…………俺は…………
俺はどうすればいいんだ？

「…………ん〜」

長い間考えた末、ある答にたどり着いた。

「…………わかったよ、仕方ないから聞いてきてやるよ」
「本当！？ありがとう！」

桂木は目を輝かせながら、俺に寄って来る。

あゝあ、これでもう後には戻れないな。

「それじゃまた明日」

「…………おう」

そう言う桂木は帰って行った。

桂木の姿が見えなくなってから、俺は溜息をついた。
めんどいなあ…………

いつもの帰り道。俺はまだ溜息をつきながら歩いていた。

昨日と同じように、頬に熱気を感じた。後ろを振り向くと、案の定結衣がいた。

「……………熱い」

「……………ぶー！優太君、リアクション薄い！」

「こっちはそれどころじゃねーの」

「……………つまんないな」

「あーちようどいい時に現れた。結衣の好きな人のタイプは？」

「ふええっ！！？い、いきなりどうしたの？」

優太君はそういうの興味ない人だと思ってたのに

そこまで驚きますか？

……………てか俺の事、そんなふうに思ってたんか！？

「俺じゃねえ！うちのクラスの奴が聞いてこいって煩いんだよ」

「へ、へえ」

とりあえずテキストにごまかした。

「好きなタイプか……………」

結衣は腕を組み考えている。

「そついや、お前って好きな奴いるの？」

「ほえっ！？そんなのいきなり聞かないでよ！」

「悪い悪い」

そうか。こういう質問はいきなり聞いちゃあかんのか……………勉強になりました。

「……………」

「……………」

あんだけ大声で喋っておきながら、いきなり静かになるのはやめてほしい。こっちも静かになる。

少し経って、結衣は顔を赤くしながら答えた。

「い……いるよ」

「何が？」

「何がって、好きな人だよ！！まったく、自分で聞いといて、忘れんなよ」

「ゴメンゴメン。それで、というのがタイプなん？」

「え………」

彼女はもじもじしながら答える。

……寒いから早く答えて？

「物静かな性格で、一匹狼みたいなんだけど他人想いで、誰かの頼み事は、グダグダ言っても最終的には引き受けてくれる様な優しい人が、私は好きだな」

「ふう〜ん、結構詳しく説明したよね」

「うん……そうだよ。」

……こんなこと話したの、優太君が初めてだよ」

ちよつとドキツとした。未恐ろしい奴だ。サラっとうつろい事言いやがる。

「どうしたの？顔赤いけど………」

しかも自覚無し！

ホントに未恐ろしい奴。

「バーカ、なんでもねーよ」

「バカとか言うなあ〜！」

そんでもって、次の日。俺は放課後、桂木に呼ばれた。もちろん、体育館の裏にだ。

「……………それで、聞いてきたの？」

「普通、こんなに早く聞けねえよ

……聞いてきたけどさ」

「……………どっちよ。まあ、いいけど、それで何て？」

俺は昨日結衣から聞いた結衣の好きなタイプを、桂木に話した。

「……………そうか」

そう呟きながら彼女は頷いている。

「桂木って、どういいういきさつで結衣んこと好きになったわけ？」

「……………」

一旦静かになる。いくらか経ってから桂木は口を開いた。

「去年、私と藤林さん一緒のクラスだったんだ」

そっぴいやそっぴいだったな、そっぴいながら話を聞く。

「ある日の昼食時に私、お弁当忘れたの気づいちゃって……………でも他の子には何も言えないし……………」

「まあ、同感だな」

「その時に藤林さんが来て、“お弁当無いの？私の分少しあげようか？”って言ってくれたの」

言いそっぴいだなあ、あいつなら。

「次の日は、彼女の友達を連れて、“一人なら一緒に食べよ？”って言ってくれて、そのあと彼女の友達からこっぴい言われたの……………」

「……………」

俺は黙って聞く。

「“桂木さんに嫌な態度とっっちゃってごめんね”って……………」

「ふう〜ん」

テキトーな相槌を入れる。

「それからのなの、彼女を見ると恥ずかしくなっぴい、話し掛けようとするそっぴい呂律が回らなくなっぴい……………」

「それで、結衣に恋に落ちたっぴい事っぴいすか」

彼女は小さく頷く。

俺は一度溜息をつく。

「わかつぱいよ、今度の休みにあいつを誘っぴいてやる」

「本当に？」

「嘘は言わない」

「……………頼んだわよ」

「はいはい」

俺の返事を聞くと、彼女はすぐに帰って行った。

「…………俺も帰るか」

そう思っただけ振り返ると、うちのクラスの男子が何名か隠れていた。多分、さっきの話は聞こえていない。聞こえない距離にいるからだ。ただ、あいつらは俺を睨んでいるようだ。

多分小声で、

「山岸の野郎が桂木さんと親しそうに話していた。羨ましくぞ！」

「まさかあいつら出来てんじゃないかね？」

とか話してんだろうな。

俺はまた溜息をつく。そして空を見上げる。

空はほとんど暗くなっていた。星が幾つか光っている。

面倒なことになったな。

どうしてこんなことになったんだ？

歩きながら考えてみる。

あ、そうだ、桂木が俺に恋愛相談なんかしなければこんなことにはならなかったんじゃないか？

…………俺がそれ断りやゝよかったのか。

また溜息。

俺は心の中で祈りながら帰宅する。

なんて祈ったかって？

それはもちろんこれだ。

“うちのクラスに今日の事が広まりませんように”

その祈りも空しく次の日には広まっていたけれど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529y/>

俺と彼女と幼なじみの関係！

2011年11月29日19時58分発行